
RAINBOW

懷裂惑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

RAINBOW

【Zコード】

Z5774E

【作者名】

懷裂惑

【あらすじ】

七人の許婚との騒がしくも楽しい学園ラブコメ！

プロローグ1赤

中学を卒業し「」の春から一人暮らしを始めるための準備をしていた3円のある口それほどつひとつつこおじつた。

「桜、引越しの準備は終わつたの？」

「ああ、もう全部終わつたよ」

「そひ、じゃあちよつとお密さんが来るからお茶菓子買つてしまへ
れない？」

「いいよわかつた」

弁当とお茶菓子を買つて帰つてみるともう来て居るのか玄関に靴があつた。

居間に入ると椅子に俺と同じ年くらいの女の子が座つていた。

「「」さんむちむ

「あつこんむはせー」

「ほひ、桜も座りなせー」

母さんに言われそのままの前に座る。

「どこの誰の子誰なの？」

「「」の子は赤嶺山茶花ちゃんよあかみねさざんか

「はじめまして赤嶺山茶花ですー！」の春から桜痴と同じ高校にかよ
いますーー。よりしへーー。」

「ああそつなんだ」

「それであなたの許婚候補なのよこいなすけ」

「へー・・・・・・はあーー。」

「声が大きいわよ

「大きくなるわーー。どうこう」とだよ許婚つてーー。」

「言葉は正しく使いなさい。許婚じゃなくて許婚候補よ」

「え？ 違うんだよー。」

「ようするにーー。いる山茶花ちゃんの他にも6人ほど候補がいる
つうことよ」

「そんな話初めて聞いたぞー。」

「そりゃそつよ言つてないもの」

「なんで言わないんだよー。」

「ぶつちやけめんじくさかつた」

「身も蓋もねえ　ーー。」

母さんの性格は知つてたけど、今までおれやがけへりやだとせ思わなかつた。

「まあ決まつちやつたことなんだし受け入れなセー」

「そんな簡単に受け入れられるかよ・・・」

「山茶花ちゃんの」と『』に入らなこのへ

「えつと・・・」

あらためて山茶花ちゃんを見るとかなりの美人だ。可愛いといつより綺麗、いやかっこいいと言つたほうがいいだらつ。スポーツでもやつているのかひきしまつた体をしていてプロポーションもいい。

「私の事いや?」

「そんなことはないけど・・・

「じゃあ文句ないわね」

「山茶花に文句はなこない母さんにはあるつむ」

「『』で御覧なさい聞き流すから」

「聞き流すのかよー」

「それじゃ私はしづらしく出かけるから一人で話しててね」

そういうつて母さんは出かけてしまった。

「えっと・・・山茶花は俺の事知つてたの?」

「うん!小さい頃から父さんと母さんに聞かされてたからね」

「他に候補がいる」とも?」

「もちろん知つてたよ」

「なんかじつ・・・いやだとか思わなかつた?」

「思わなかつたよ、だつて写真とかビデオとか見ていい人だつて知つてたからね」

「そんなの見てたの!?」

「うん、桜君のお母さんが送つてきてたからね」

「そんなことしてたのか・・・」

「実際に会つてみてもいになつて思つたよ、だから他の候補には絶対負けないからね!..」

「他の人たちにはあつたことあるの?」

「あるよ」

「知らないのは俺だけかよ・・・ところで他の人ってどんな奴らなの?」

「うーん・・・それは私からは言えないなあ・・・」

「ちょっとだけでもいいんだけど」

「まあ明日になつたら一人あえるから」

「そりなの?」

「うん、入学式までに一日に一人ずつ会って来るようになつてるから」

「なんでそんな面倒なことを?」

「桜君のお母さんがその方が一人ずつじっくり紹介できるし面白いからだつて」

「明らかに後半が本音だな」

「そりだね」

「まあ、とりあえずこれからよろしく」

「うふーよろしくねーーー。」

プロローグ1赤（後書き）

登場人物紹介

神樹桜
しんじゅざくら

主人公 15歳 6月13日生まれ 身長177

成績は上の中 家事は人並み 突然現れた許婚達に振り回される苦勞人

神樹龍胆
しんじゅりゆうとつ

主人公の母 41歳 9月24日生まれ 身長165

この小説におけるナンバー2 ちなみにナンバー1は彼女の母 家事は料理と洗濯は人並み 掃除はプロ級 笑いながらとんでもないことを言つたりやつちゃつたりする人

赤嶺山茶花
あかみねさざんか

許婚その1 15歳 7月16日生まれ 身長162

主人公の事は割と好き 成績は下の中であまりよくない 家事は壊滅的 剣道部で中学の頃は全国大会優勝の経験あり おおぞつぱで人の話を聞いてなかつたりする

プロローグ2 橙

あのあと母さんが帰つてくる前に山茶花は帰つて行つた。

昨日は顔合わせだけで本格的な許婚争奪戦は俺が7人すべての候補にあつてからだと母さんにいわれたらしい。

「しかし7人か・・・どんな奴らなんだろう。山茶花みたいにすぐ打ち解けるような人がいいな・・・」

母さんは親同士が決めたと言つていたから当然納得していない人もいるだろ?。

それに俺に惚れるような女なんてあんまりいないだろうしな。

「ふう・・・これで最後か」

俺は今高校に通うために引っ越したマンションで引越しの後片付けをしている。

業者の人があらかたやつてくれたので一時間もあれば終わってしまった。

ちなみに母さんはめんどくさいからと手伝ってくれなかつた。まあ・・・はながら期待していなかつたのでべつにいいが。

「さて・・・あとは隣への挨拶だな」

ピンポーン

「ん?誰だ?母さんか?」

引っ越してきたばかりだし荷物は全て運んだ。来るとすれば母さん

ぐらいしか思いつかない。

ピンポーン

「はーー」

ドアを開けるとそこにはおつとつした感じのすらシートカットの可愛い女の子がいた。

「桜君？」

「はい、あの・・・どうひらめきよしつか」

「はじめましてあたしは君の許婚候補の一人榎栄離壘栗だよ

「君が？」

「そう、あがつていい？」

俺が言う前に離壘栗は中に入ってしまった。
俺はあわてて後を追う。

「おー以外と片付いてるね」

「えーと・・・なんか飲む?」

「ああなんでもいいよー」

麦茶を一人分入れて持つていぐ。

「あつがとね」

「といひでよへりがわかつたな」

「せりやまあ龍胆さんこ聞いたからね」

「せりやせりか」

「半年前」

「そんなんまあ」？

「桜君やー、いり豊つたときになんか変なことなかつた？」

「せりこえば・・・俺が新居を探していりに来た時他の物件は満室だつたのになぜか」だけ空いてたつけ」

「いりの家賃知つてる？」

「知らないけりの讼をと間取りならかなり高にだろ」

「月一万だよ」

「安つ……なんで……なんでそんなに安いの……？」

「だつていり桜君のお母さんのマンションだもん」

「マジで……知らないかった……」

たしかに五百円で困つたことは一度としてない。

「なんにも知らないんだねー」

「俺だけ聞かれてない」とがぶかぶんな・・・」

「うなみに私もこのマンションに住んでるんだよ」

「やうなの?」

「この部屋は一番右端でしょ、それで隣から端っこまでのこの部屋は桜君の許婚たちが住むんだよ」

「マジかよ・・・」

「みんな許婚の座を狙つてゐるから不公平があつたわけないってことで竜胆さんが手配してくれたんだよ」

「ああ、母さんならやつやうだな。ついてどもつもつ全員こらのか?..」

「つづん、住み始めるのは入学式の日からでこまは皆実家にこらむ。まあ既に家具とかは運んであるけどね」

「やつぱつそれも母さんが決めたのか・・・ヒカルドーつ聞きたい」とがあるんだけど」

「なに?」

「離壘栗は俺と許婚になつたこと黙つてゐるのか?..」

「当然思つてゐるよ、なんで?」

「いや、親同士が決めたって言つてたから乗り気じゃない奴も中に
は居るのかなあと」

「うーん他の人は分からぬけどあたしは桜君の事好きだよ」

「わつか……ならいいんだけど」

「うん、それじゃあそろそろ帰るねこれからよひこへ

「ああ、じりじり

プロローグ2 橙（後書き）

登場人物紹介

橙
とうさかひなげし
栄
めい
雛
ひな
墨
すみ
粟
あわ

許婚その2 15歳 2月7日生まれ 身長152

成績は中の中と中の下を行つたり来たりしている 家事はそこそこできる 陸上部で以外に足は速い おつとりした性格でマイペース

プロローグ3 黄

雑誌栗が来た次の日、マンションの周りの地理を理解するために買い物ついでに散歩をしデパートで食料と備品を買った帰り道、いかにも私迷つてますといった感じの人についた。

「声をかけるべきかな・・・？」

とはいっても俺もこの辺のことについてはさつき知ったばかりだ。こちらも迷つたりしないだろうかと不安になる。

「でも困つてる人を見捨てるのはちょっとな・・・」

意を決して俺はその人に声をかける。

「あのー」

「はい?」

でかい、それがその人の第一印象だった。明らかに190近い身長をしているしそれに胸もかなりの大きさだ。

おもわず見入つてしまつた。

「もしもーし?」

「はっ！すいませんーとあの大きいですね」

「はい?」

混乱してつい妙な事を口走ってしまった。

「あっす すいません」

「ええよ別にいいと言われるのは慣れどるし、それでな?」

「ああ、何か迷つてゐようだったたので」

「道教えてくれるん?」
「おお、おきたいんですか?」

その人に地図を渡される、がどりみてもその場所に心当たりがある、
とこつかあります。」

「あのー元にこきたいんですか?」

「いやで、わからへん?」

「いえ分かりますけど、元にこいつたいなんのようなんですか?」

「じつはなあ、元にこいつの許嫁が住んでるんよ。まあ正確には私はまだ候補なんやけどな」

間違いない、なんとなくそんな気はしていたが・・・

「あの・・・その人の顔知ってるんですか?」

「写真は渡されたんやけど失くしてしまってな、顔もあんま覚えて
へんねん」

「うち記憶力わるくてなーと笑いながらいづ。

「案内しますね」

「おおやい」

その人を連れてマンションに向かひ途中でいろいろと聞くといつた。

「お前はなんていつんですか？」

「おのれの女前はな、黄夕水仙きせきすいせんこいつさんや、あんたは？」

「神樹桜です」

「神樹桜……」

「どうしました？」

さすがに気付いただろ？

「いやどうかで聞いたよつな気がしてな

気づいてなかつた。

「あ、そのうご想こ出すやい」

「ははは……あ、着きましたよ」

「おおやい、ほな」

「いや俺もここに住んでるんで」

「やうなんか、ん? やうひ」とせ・・・

「いまだれば気がついただれ。」

「あんたたちと回じ許嫁候補やなつ・・・」

全然気づいていなかつた。

「び」をびつ見たら女に見えるんですか! あなたの許嫁ですっ! !

「知つとつたよ」

「知つとつたんかい! !」

「そんな怒らんでもええやん、たんなるあこたつ代わりのギャグや
で」

「はあ・・・なんか疲れたよ・・・」

「ほんなら荷物もつたるわ」

「でもこれけつひつ重いですよ」

「楽勝や」

水仙は荷物を軽々と持ち上げたり落したりしてしまつ。俺もあわてて後を追いかけた。

「力持ちなんですね・・・」

「あなたの力には自信あるで」

俺の家に着くとまず冷蔵庫に食品を入れ、そのあと水仙と話す」と
にした。

「えっと・・・あらためてあこせつを・・・神樹桜です」

「黄夕水仙やよろしくうな、あと敬語やなくしてええで、回二年やし
許嫁なんやがり」

「いや・・・水仙って背が高いからつ」

「まあたしかにかなりでかいしなー」

「ひやつたらそんなに大きくなれるんだ?」

「鍛えるんやー」

・・・どうや?..

「桜だつて体鍛えどるやう?」

「ええ、まあ」

「それにかなり強いやう」

「まあ、一応は」

3歳のころからずっと母さんに鍛えられてたからな。

「うち強い人が好きなんよ。せやから桜のことは他の女にはわたさへんで」

「やうか・・・

どうやら水仙は許嫁にたいして乗り気なようだ。

「なんやちょっと眠くなってきたわ寝かせてもうひとつ」

「え・・・、もうひとつ」

「うやいなや水仙は床に横になり寝ってしまった

「なんつつか・・・マイペースなやつだな・・・ま、とつあえずこれからよろしくな

プロローグ③黄（後書き）

人物紹介

黄
きせきす
夕水仙
いせん

許婚その3 15歳 4月6日生まれ 身長189

成績は上の下 家事は掃除はあまりできないが料理はわりとできる
洗濯は普通 多種多様な武術をやっている 握力は150ある 巨乳、というか爆乳

プロローグ4 縁

リココココココココココリ・・・

「フーん・・・」

電話が鳴る声で田中が覚めた。時計を見るとまだ6時だ。

「誰だこんな時間に・・・もしもし? 神樹ですか?」

「ハハハ! も神樹ですが?」

「なんだ母さんか・・・何が用?」

「用がなくちや電話してはいけなこのですか? と竜胆さんばベタベタな質問で返します」

「・・・・・なにそれ」

「こや、こま人気のラノベのキャラの口調をちょっとまねしてみたのよ」

「いい年してラノベ読んだんのかよ」

「いこじやない、本当に面白いものは誰が見ても面白このよ

「まあこまわり母さんの趣味に口合ひしないけれど、それで? そんな」と言つたために電話してきたの?」

「まあ、6割がたそりなんだけね」

「多こな！」

「だつて言つてみたくなるじゃない、『人が「いいのよつだ」とか『田が、田があつ』とか』

「なんでもラップタネタなんだよ」

「私が好きだから」

「はいはい、じゃあ残りの4割の理由を聞かせしちゃつか」

「今日暇？」

「暇だけど？」

「あなたが今日暇だとこいつ」とを、この私はあらかじめ予測していました

「・・・・・・・・」

「あれ？元ネタわかんなかつた？」

「いや・・・知つてゐるけどマイナーなキャラで来たなあと・・・」

「作品自体は有名だけどね」

「いいから本題いつてくれ」

「こまから言つ場所に1~2時までに来てほしこのよ

「わかつた」

「高級料亭 A concierto にて」

「料亭らしからぬ名前だな」

「結構有名なところよ。なんでもフランスで中華料理の修業をした
あたシエフが作る京懐石で有名なんだつて」

「なんか行きたくなくなつてきたな・・・」

「じやあわつこつ」と、ちやんと行きなぞこよ

「はこねこ」

「ううう・・・だよな・・・」

そして1~1時に家を出て電車とバスに乗り向かう。

思つていたよりでかい、普通の服で来てよかつたものかと不安にな
るがとりあえず入つてみるが入口で止められてしまつた。

「すいませんがお客様つちは一見さんお断りなのですがどちらさま
からのご紹介ですか?」

「ああ、えーと・・・神樹龍胆ですけど・・・」

とつあえず母さんの名前をだしてみる。

「し・・・神樹さまのつー・?・・失礼いたしましたつー・!」
「へどりやー!」

かなりの効果があつたようだ、うるたえながらも案内される。

「ひかりの間にお通しするよりお申せつかつております」

あせびの間とこつといひに通される。

「すでに連れの方もお待ちです」

「え? あ、ああ・・・」

なんとなくそんな気はしていたがおそらく許婚の一人だらつ。

「それでは」ゆっくり・・・

そういつて店員さんは行つてしまつた。

中に入ると着物を着た女性がいたのでその前に俺も座る。

「はじめてお目にかかりまんなか、うちは縁清稚児百合^{ゆかりよしめいりゆ}です。あんさんのが桜はんどですか?」

「はい、そうですけど・・・京都のかたですか?」

「やうやくわ」

稚児百合さんは着物の似合^う京美人といった感じで肌が真っ白で腕も細く髪も黒々として綺麗だ。

「あの・・・待ちましたか?」

「いーや、そないにまつとりますんの分くらいこどす」

「けつこひまたせちやつたみたいですね・・・すいません」

「別によろしあす、うち待つの好きどすから」

「いえ、俺は待つのも待たせるのも嫌いなんですよ」

「やせしいんどすなあ」

なんかこの人と話してると力が抜ける感じがする、といづか落ち着くかんじだ。

「といひで桜はん」

「はい、なんですか?」

「なんで敬語なんどすか? 同じ年や」

「ああ、なんか稚児百合さんには失礼な言葉を使へないような気がして・・・」

「別にしづかましまへんよ。いづれしづかのムコはんになるんやし」

「えつと・・・それは・・・」

「しづかは他の娘に負ける氣はおまへん。それともしづかの事かなんい

どうか?」

「えつ・・・そんなことはないであります。」

「やつたらええでっしゃる? 敬語はやめておくれやす」

「はー・・・」

なんといつか・・・」の人に一生かなわないだらうなあと思った。

「あと名前は呼び捨てでかませんよ」

「えつとじゅあ・・・稚児百合・・・でここのかな?」

「よみしおす、やみなりあらためひ。」これからよみしおう桜はよ

「へじひみねじめい」

プロローグ4 縁（後書き）

人物紹介

縁
清稚
児百合

許婚その4 15歳 9月19日生まれ 身長162

成績は中の中 勉強しだいで上の上になつたりする 家事は料理は
プロ以上その他は普通 怒らせると一番怖い 大会社の社長令嬢

プロローグ5 青

高校での授業に備えるため中学の復習でもしようかと思つたが家ではいまいち集中できそうにないので自転車で10分くらいのところにある図書館に行くことにした。

1時間ほどたつたころ隣に誰かが座つた。今日は平日でまたたく人はいなく、席も俺が座つている所以外は空いていた。
わざわざ隣に座らなくても、と思いながら隣を見るといつも勉強をするうしろ、ノートや教科書を出し始めた。
しばらくして、うしろで「おーい」と思つたらいきなり声をかけてきた。

「ねえ、シャーペン貸してよ ベ・・・別にあんたが隣にいただけであんたのシャーペンを借りたかったわけじゃないんだからね!」

「・・・・・はあ?」

あぜとこどもするとその子は

「やば・・・しふりつた・・・」

と言つて出て行つてしまつた。

なんとなくいやな予感がして後を追いかけるとそこにはすみつけだなにやらブツブツとつぶやいていた。

とりあえず声をかけてみる。

「おーい」

「ひやひつー?」

おどりじてこつちを振り返るとなかなかの眼鏡美人だつた。

「な、ななななんですか！？」

「いや、えーと・・・君俺の名前知つてたりする？」

「神樹桜さんですよね？」

あ、やつぱり知つてた。てことはこの子もやつなんだらう。

「えつと・・・許嫁の一人だつたりする？」

「はい、私は青陽露草はるやつゆくさです」

「えーと・・・さつきのなに？」

「ツンデレです」

「・・・なにそれ？」

「ツンデレというのは普段はツンツンしてくるけど好きな人と一緒につたりすると『デレデレ』してしまう属性のことです」

「いやそれは知つてるけど・・・なんでもさつきそれをやつたの？」

「桜さんはいったいどんな属性で向かえば効果あるのかと思いましてね」

「属性つて・・・」

「せひその感じではシンボル属性はなさそうですね」

「えっと・・・露草つてひょつとしてオタクとか?」

「ちつ違こますよー!たしかに週4で秋葉にいきますけどー・ゲームや漫画は観賞用と保存用と普及用に最低3つは買いますけどー」

「・・・・」

「コスプレしたり同人誌書いちやつたりしてますけど決して!決してオタクではないんです!ー!」

「オタクでしょ?」

「違いますー!ああ、ダメです!ダメなんです!ー!オタクだなんてばれたら嫌われちゃう!ー!」

「えつと・・・落ち着いて・・・」

誰もいなことはいえ図書館で騒ぐのはダメだろ?。とりあえず図書館近くのファミレスに移動した。

「落ち着いた?」

「はい・・・わざは取り乱してすいません・・・」

「なんかあったの?」

「昔じろごりと・・・」

「まあ俺はオタクだからって嫌いになつたりしないから・・・」

「本当ですか?」

「うふ、好きな物を好きって言える人のどこが悪いの?」

「あっがとうござります・・・」

「じゃあこれからよろしく・・・」

「あ~~~~~っ!...」

「ビ、ビラしたの?」

「今日はイベントに行くんでした!...早くしないと始まっちゃう!...」

「そ・・・そ・・・」

「じゃあ私はこれで!...また会いましょう!...」

「うううと脱兎の如く店を出て行ってしまった。

「なんか・・・すい奴だったな・・・まあ、俺はああゆう奴好き
だけどね」

プロローグ5青（後書き）

人物紹介

青陽露草
はるやつゆくさ

許婚その5 15歳 6月26日生まれ 身長170

成績は中の上 家事はできるけどやらない 絵はかなりのうまさ
ちなみに眼鏡はキャラ付のための伊達メガネ

プロローグ6藍

5日連続でキャラの濃い人たちに会つたため自分では感じていなかつたが疲れていたのだろう、10時ぐらいまで眠つてしまつた。

「かなり遅くまで眠つちやつたな、起きて起きるか・・・」

「おはよう

「ああ、おはよう

「朝^{アサヒ}はんできてる

「ありがとうな

テーブルの上には純和風の朝食が出来上がりつていた。

「美味そつだな

「めしあがれ

「いただきま^す

「うわ美味しいなこれ

「おかわりは?

「ありがとうございます」

「あべておれこにたいへんうつせめた」

「アーリアヒルゼル」

「おやめつねまどした」

「アーリアヒルゼル」

「せこ~」

「こやまあなんどなく分かってんだがどうせ聞こへんのか
と思つて」

「なに?」

「君だれ?」

「あなたの許婚候補の一人
ひなやかわい
藍隱藍」

「やつぱつ

「へいへい

「ああ、みんな
アーリアヒルゼル
へいへい入ったんだ?」

「ピッキング」

「あるな

「わかつた」

「わかればいこよ

「み

「次からは扉を壊す

「やめてくれ

「じゅあざつしじと

「とつあえず俺に無断で入るつとするな

「でも

「でも?

「竜胆さんから許可はもうつてゐ

「・・・・・まあ、想像はしてたよ・・・

「じゅあ私はこれで

「ああ、じゃあね」

「こうして藍は帰つていった。

「なんだつたんだあいつは・・・

プロローグ6藍（後書き）

人物紹介

藍
らん
隠
やす
藍
あい

許婚その6 15歳 11月21日生まれ 身長155

成績は中の上 家事は万能 つかみどころのないふわふわした性格
ピッキングや尾行などの怪しい技をいろいろともつている。

プロローグ／紫

夕方五時、そんな夕飯の支度をこなつかと思つたとき電話がか
つて来た。

「 もしもし」

「 もしもし・・・私メリーさん今 あなたの後ろにいるの・・・

「 べだらなこじとやつてなこじわらわと用件言ひにま

「 わらわよひとわらんとひりでくれなことをわらえとばくわら
よへ。」

「 やとな」と泣く声で柔じやなにでしう

「 爪の心せじロホオホガネよりも柔いのよー。」

「 十分丈夫だるー。こつかむつちわかりやすこ金属で警えろ
よー。」

「 お母さんはガタックが好きだったな」

「 僕はキックボッパーが・・・ってそんなこと話してゐる場合ぢやな
くじ、用件をわらわとこいつてよ」

「 夕飯まだよね」

「 まだだけじ」

「じゃあ今から並ぶお店にいってね。いいよね？答えは聞いてない！」

「今日はライダーネタか・・・」

「とにかく行きなさいよ」

「わかったよ」

そんなこんなで夜7時俺は母さんに言われたレストランに来ていた。

「何かすうじい高級そなんんですけど・・・」

まあ、母さんの紹介だから大丈夫だらうと思つて入るうとしたら店員に止められてしまった。

「すいませんが今日は貸し切りとなつております」

「えっと・・・神樹竜胆の紹介なんんですけど」

「ああ、息子さんですねではどうぞ」

案内された席にはすでに人が座っていた。まあおそらく許嫁候補の最後の一人なんだろうなと思いながら席に着いた。

「こんばんは」

「・・・・・・・・・・・・」

言葉が出なかつた。別にとてつもなく美しかつたとかそういう理由ではない、判断しようにも顔が見えない。

彼女は仮面をかぶつていた。

最近アニメ化した某小説の青龍刀をもつたキャラがかぶつているような般若の面をかぶつていた。

なんでそんなものを？と思つていると・・・

「なんで・・・」

「？」

「なんで挨拶したのに答えてくれないの？なにか間違つちやつた？私なにか間違つたことした？したなら『ごめんね、謝るから、・・・』そうだよね謝つたつて許してくれないよね、私なんてこの世にいないほうがいいんだよね？そうだよね？あ・・・『ごめんね、こんな分かり切つたこと聞いちゃつて。』

「・・・」

「『ごめんね、こんなところに呼び出して、迷惑だつたよね、ほんとに』『ごめんね、今すぐ死んで償うからね』

そう言い終わつたとたん彼女は懐からサバイバルナイフを取り出し手首を切ろうとした。

「ストップー！」

「離して！！」

俺は彼女の両手を押えた。

「いいから落ち着け！！」

「だつてだつてあなただつて私に死んでほしいうて思つてゐんでしょ！？こんな変な女いないほうがいいつて思つてゐるんでしょ！？」

「思つてねーよ！いいからナイフを放せー！」

「…」

「やかましい」

卷之三

ゴンといつ音とともに彼女に飛んできたなかがあたつて彼女が倒れた。

「まったく……心配になつて来てよかつたどす」

稚児百合！？なんでもこじに？

「その子はうちの畠からのお連れどすねん。なんちゅうかその・・・
対人恐怖症として。」

「それで仮面を？」

「ええ、まあ詳しいことは彼女から聞いてください」

「はあ・・・といふでさつき何を投げたんですか?」

「あれどか

稚児百合の描画したところを見ると硬くて重そうな銅像が転がっていた。

「・・・なんですかあれ」

「このレストランの Campsis grandiflora の創始者イベリスシーハの銅像どす」

「なんであんなもの投げたんですか！危ないじゃないですか！ついでそんなもの投げられるんですか！！」

「ええと・・・まず最初の質問に對しては彼女が丈夫をかいどもない。次の質問に對しては鍛えてますからとしか」

「もうですか・・・としか」ひばは返せませんよ・・・」

「うへん

仮面をかぶつてるので分かりづらしが起きたようだ

「あ、ゆつちやんだ、なにしてるの？」

「あんせんのこと」が心配で来たんじすよ」

「やつなんだ、ありがと」

「それよつも桜はんこちんと血口紹介おしゃす

「あ、うん。」

立ち上がりで向き直りお辞儀をした。

「初めまして、私は靈紫秋桐まいむらしづきとうです」

「ああ、よひじく」

「ほなつは」れで

「あれ？ ゆうひやん帰つちやんの？」

「今日はあんせんの時間でつしやる。ほな一人ともまたあす入学式
であいまひよ」

そつこつて稚児百合は店を出て行つた。

「えつと・・・じゃあ食事でもします？」

「あ・・・はー」

「まさらながり」がレストランであることを思つ出した。
騒ぎが収めたのを確認したウェイターが料理を運んできた。

「美味しいそうな料理ですね」

「はい、ここは私の父がオーナーをやってるんですね

「なんですか」

「今日はショーフが腕によりをかけて美味しいものを作ってくれるそうです」

「それは楽しみです」

確かに料理はどれもこれも美味しかった。食事が終わったので俺はおもいきつて秋桐に聞いてみることにした。

「なんで仮面なんかかぶってるの？」

聞いたとたん彼女の様子が変わった。

「・・・変ですか？」

「え？いや・・・」

「いいんですよ別に、私気にしませんから」

そう言いながらもグラスを持つ手が振るえていた。

「その・・・なんか変なこと聞いたりやつたみたいですね、すいません」

「いえそんな、あなたが気にする必要はまったくもって微塵もありません、私がこんな格好しているのが悪いんです。ほんとに・・・どれだけ人に迷惑かけたら気が済むんでしうねえ私は。」

俺は秋桐の手にまたナイフがあるのを発見した。

「あのそれ・・・」

「ああ、これですか？大丈夫ですよ、今すぐあなたを不機嫌にさせたものを排除するための道具ですから。あなたに危害は加えません」

「いややうこう意味じゃなくて・・・」

「ああ、そうでしたねすいません、私なんかが、私みたいなものは返事するだけで、目に映るどころか存在するだけで迷惑ですよね、大丈夫です、もうすぐいなくなりますから」

「ちよ・・・待つ・・・」

秋桐がナイフを振りかぶった瞬間。
イベリスショフが飛んできた。

「はぐつ！？」

後頭部に当たり再び氣絶する秋桐。

「帰らなくて正解でした」

「稚児百合ーー。」

「まゆつきじこの子は・・・」

「助かつたよ」

「桜はん、この子を止めるときは思いつきつやつたほつがよひしあす

「・・・みたいですね」

「まあ、悪い子ではおまへん。ただちょこトラウマがあつてネガティブで対人恐怖症なだけどす」

「それけつこう大事ですよね・・・」

最後の最後で大変なやつが来たなあと思つた。

「まあ、あすさかい」の子もわいいらとおんなじく仲よしじてあげて
おくない」

「はい・・・」

そうだ、これで終わりじゃないんだこれからなんだ、と明日からの高校生活を不安に思つたがまあなんとかなるだらうと前向きに考えることにした。

プロローグ／紫（後書き）

みこむらあさり
靈紫秋桐

許婚その7 15歳 9月6日生まれ 身長180

成績は学年トップ 家事は料理以外は得意 昔色々あつてこんな性格に 仮面で隠れていてわからないがかなりの美人で水仙に負けないくらいの巨乳 稚児百合とは幼稚園の頃に知り合った 体が丈夫で傷もすぐに治る特異体质

入学式 1

今日は高校の入学式なので制服に着替え朝食を食べ、食べ終わつた
ころチャイムが鳴つた

・・・

「アーティスト」

勢いよくドアをあらぬところには

卷之三

一九四二

おひさまのわん

「காலாதூர்」

ମୁଦ୍ରଣ

七

卷之三

全員集合していた

「おせよひ、といひで誰だへ。さゝきチャイムを連打したのは」

「はーいあたしあたし！！」

手を上げた山茶花に俺はチヨップをくらわせる。

「いたつーなこすんのーーー！」

「一回押せばわかるつのはーーー稚児百合も止めてよ

「起きてへんかもしけへんちゅう」とも考慮してあえて止めまへん
どした」

「あつそつ・・・#あ監とつあえず中上がりなよ」

とりあえず二人とも中にあげる」とこした

「以外とかたずいてるんだね」

「H口本ないのかH口本ーーー！」

「探せ」

「やめーな

「なあ、お茶頂戴」

「あ、じゃあ私がいれますね」

「私も手伝います、桜さんお茶どうですか？」

「戸棚に入つてゐよ」

雛壇栗はきょろきょろと覗渡し、山茶花と藍がはしゃいでいるのを稚児百合が止め、水仙に露草と秋桐がお茶をいれている。

「といふでなににきたんだ?」

「せつがくやわかに歸で行ひ、山茶花はんが提案しまして、ほめて歸で迎えに来はつたんや

」

「やうか、でも早すぎない?」

まだ入学式までにはかなりの時間がある。

「山茶花はんと水仙はんが急かしたさかい」

「ああ、なるほど」

その一人はと詫ひと山茶花は藍と雛壇栗といつしょにゲームをやつていて、水仙は座つたまま寝ている。

「といふでわあ

「はい、なんですか?」

「秋桐と露草がなんか普通なんですけど

「あの一人は確かにおかしいといふがありますけどないに頻繁におかしくならはつたりはしまへん。最初に会つたときは一人とも緊

張じといったんや

「こやなんか最初と感じが違つたんで」

「別に作者があないなキャラを書くのがめんどくさいな」と
かじやあらしまへんで

「何言つてごですか?」

「「うわの話すかまへんでおくない」

「はあ・・・」

「ねえみんなー早く学校こいりつーー!」

「こーーー!」

「一人ともよひこぼでけへんみたいですね、ほなそひせん
行きまひょか

「やうだね」

「ほんなら行こつか」

「湯呑かたづけないと」

「置っこて良こよ俺あとでやぬか!」

そんなこんなで俺達は学校に向かつた。

入学式①（後書き）

舞台裏

稚児百合（以下稚）「そんなこんなでよつやつとほじまつましたね
RAINBOW」

桜「ヒーヒーなんなんですか？」

稚「ヒー」は本編では語られへん裏話をしけるト「、通称舞台裏ビズ
ちなみに同会進行はほほひけがやらせむりで」

桜「でも稚児百合は出番があいから他の奴にやらせた方がいいんじ
やない？」

稚「うちが同会進行をやつてるのはうちが作者のお氣に入りだから
どす」

桜「なんかずるーね・・・」

稚「かてキャラの設定についてもこじて考えたのつてうかだなびす
ねん」

桜「そうなのー？」

稚「ほとんどのキャラは行き当たりばつたりで書いてまんねん

桜「そんなんでもともに書けるのか？」

稚「さかいに今回いきなり性格が変わったのがふたりおつたやん」

桜「ああ、なるほど」

稚「本編でもちょいふれてるんやけどあの一人の性格は正直作者が書きにくいくて思つてしまたのよ」

桜「そんなんでえていいのか？」

稚「オタクとヤンデレは好きなんやけど書きにくいくてのが本音ね」

桜「俺は大丈夫だよね？主人公だし」

稚「主人公だからって油断せえへん方がええで、作者が今はまつてるアニメとか漫画とかで変わつたりしはるかもしけんさかい」

桜「そんな自由なのがこの作品・・・」

稚「さて、そろそろ終わりましようか。とその前に、舞台裏では質問なだを受け付けてます、どしどし送つてください」

桜「送つてくる人なんているのか？」

稚「まあ、のんびり待ちまひよ、そんならこのへんで、ほなさいな
ら~」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5774e/>

R A I N B O W

2010年10月21日14時18分発行